資料紹介

屋形島で大鯨を仕留める

―菊江浦元足田社家の「当浦日記」から―

解説・御註　羽柴　弘

はじめに――

菊江浦の王子神社の元神職足田社家に有名な「当浦日記」と題する古文書の冊子がある。当浦は即ち菊江浦をさし、外に猪事浦、九市尾浦など数冊の、主として神社に関する記録であるが、当時は祈祷とかお神籤とか、神職の役割が随所に伺えて、流行病とか凶作とかの記事をかなり正確に伝えていて、貴重な史料となっている。

この史料は、寛政九年の十二月、屋形島に満潮の汐に、長さ七尋（約十三メートル）の鯨が迷いこんだにはじまる事実の記録である。文かなかの達筆で、正確に書かれているが、原文のままだと理解しにくいので、句読点をうち、段落をつけ、若干の御注もそえた。

（□のところスコピー不明瞭判読不能）

△寛政九年十二月
△同じは同様のこと
△屋形島の別称

△当に
△（読めず）

明年極月七日鯨上り候處、長サ七尋余丸り同所。中鳴三つぐい〻間に満塩ニはせ上り候。仍て鳴の若者ども追々走り出で、打ころし、当村へ注進致し候。仍て其夜□ち酒米など遣す。

明る朝鳴のうしろへこぎ廻し、大方切取り、其後、御城下へ骨鯨と申立て届出で申候処、則ち切身を以て、殿様始め御役人中御賞賜成され候。

則ち見分には浦方手代老人参られ候。依つて、当ず時へこぎ寄せ見分致し、百尋わた杯御城下へも左せ、切身拵送り候。当村役人切身差出候事ども、殊の外気遣ひ居候処、如何なる事に心、外ノ村は相成らず、当村斗りの札入れに相成候。

仍て小買人立会い候へ共札入れもなくこれあり候処、残身骨まで当所へ下し置かれ候。誠に首尾よき事どもなり。

此の義につき当村弥吉と申す小買、当鯨切取り相談の節、後日のとがめを恐れ、当社へ御伺うかがい候処、甚だ宜しく、後日の気遣ひこれなき由御神託これ有り候。仍て立会い切取り候。

さて此度鯨候につき不思議の事ども多くこれ有り候。

此度当社御普請入用銀不足ゆえ、小庄屋久左衛門頼に依り、地目付半兵衛を同道にて、九市尾に銀借用に罷り越し候。則ち七日、段々世話致し候へ共借用致し得ず、罷り帰り小庄屋方へ立寄候処、右鯨上り候由申し来り候。

先日村中寄合の節、取立等一向埒明き申さず、小庄屋申し候は、程なく節季故御普請銀出来申すまじく、流鯨にてもひろい来るべし杯、あだ口申し候。

又〻当日、小庄屋も下浦へ参り候。米つき臭にて小庄屋申され候は、なぎもよし、鯨にても□□上り候はばかようの世話有るまじきなど口すさみして帰り候処右の仕合、

△検分、検視。
△場所不明、屋敷の洲の意か。
△切オ付、つけとどけで小買人の入札は他人浦のことを知らせなかったこと
△入れ札せんで、浦金杯をつくり貰った
△王子神社
△王子神社改築
△神のお告げ。
△神社改築費の取立
△年末
△有難の義か。

微細聞き合せ候処、□不思議の事に候。先ず御城下首尾能き事□□御園の悪き、御普請銀借用埒明き申さざる事、み□小庄屋へ度々口言を以てせしむる事ども、誠に氏神より御普請料に下され候事と賞え候。

仍って、御普請入用不足分走賃目引取り、又村中男代走人前四文づつ当り候。其外小買中余銭助用に相成り候様賞え候。又小買中離より、丈幡走対奉納これあり候。

△社頭に立てる幟

俗に言う、鯨一頭上がれば七浦うるおう、と。節季を間近、神社の改築費の調達に困り果てていたところに、天の恵えのように生きた大鯨が、すぐ目の先の屋形島にあがったので、これは驚喜せざるを得なかった。

鯨の切身は、まず浦中の台所を賑やかにしたであろうし、又小買人の手によって、近くの浦々に売りさばかれたことであろう。幸い旧暦の十二月、寒中であるから峠を越して堅田から城下までも運ばれて、この年の暮最大のニュースとして、かなり長雑もついて評判されたことであろう。

ところが、上浦・中浦・下浦にわたって鯨浜という地名があったり、鯨の墓と呼ばれる古墓があったりする。その中には、死んだ鯨が漂着して、その始末に困ったという伝承もある。この屋形島の鯨の場合は、活きた鯨で、若い漁師達が千載一遇とばかり、血をたぎらしてたたき殺した光景が、目に見えるようである。

おわりに、足田社家の記録は目に見るように、生き生と書かれてあって実に面白いが、詳細をつくしていないが、神社記録である以上当然のこと、しかし貴重な資料である。

（おわり）

随想

わが故郷の「元田誌」の編さんに当って

会員　市野瀬　仁

今年の正月に、私は氏神をこじらせて、二週間ばかり寝こんでしまった。少し気分がよくなったころ、今年の研究テーマを考えた結果、「市野瀬」という名字について調べることにした。

私の生まれた弥生町大字大坂木字元田には、戸数四十二軒の中、市野瀬の姓が十一軒もある。市野瀬の姓は全国的にも珍らしく、大分県内にしてもこれぐらいまとまってある所は私は知らない。

私の家は、市野瀬という大庄屋（市野瀬文雅氏の祖先）の数地の一部にあって、六〇年前、川一つへだてた竹ノ原という所から転居した。名字も大庄屋の市野瀬にならって、つけたものに違いないようである。

ところで、この大庄屋の市野瀬家（旧役と呼んでいたが、火事で焼けて今はない）から四百㍍ほど離れた広瀬という所に、同じく市野瀬（市野瀬保秀氏宅）という旧家がある。この家も大庄屋であったと言い伝えられており、両家とも系図と資料が残っている。残念なことに、旧役と呼ばれる市野瀬家の墓地は、崖崩れのため一部しか残っていないが、広瀬の市野瀬家の方には、歴代の祖先の名前の刻まれた墓が残っている。

両家がどんな関係であったかは別として、市野瀬の名字の由来を探るには、両家の資料を調べることから出発